

直言座談会

＝第六回＝

朝鮮半島・米国・日本

朝鮮戦争の再発は国際情勢が許容しない。しかし日韓関係は従来のように日米会談を待って決定されるべきものではないし、小さな局面だけの体裁づくりでゆがめられてはならない

慶州の“三種の神器”

本誌 韓国については、さまざまな議論がむしろ過ぎるくらいあるわ

けですが、何か想像力を欠いた、といいますが、いわば韓国を自分の心情の表現の代償にする、というふうな議論が多いような気がします。石原さんと

中嶋さんは、最近韓国からお帰りになつたようですが、ベトナム情勢の急変以後の韓国についての率直な印象から始めていただければ、と思います。

東京外国語大学助教授

中嶋 嶺雄

神谷 不二

石原 慎太郎



石原慎太郎氏



神谷不二氏

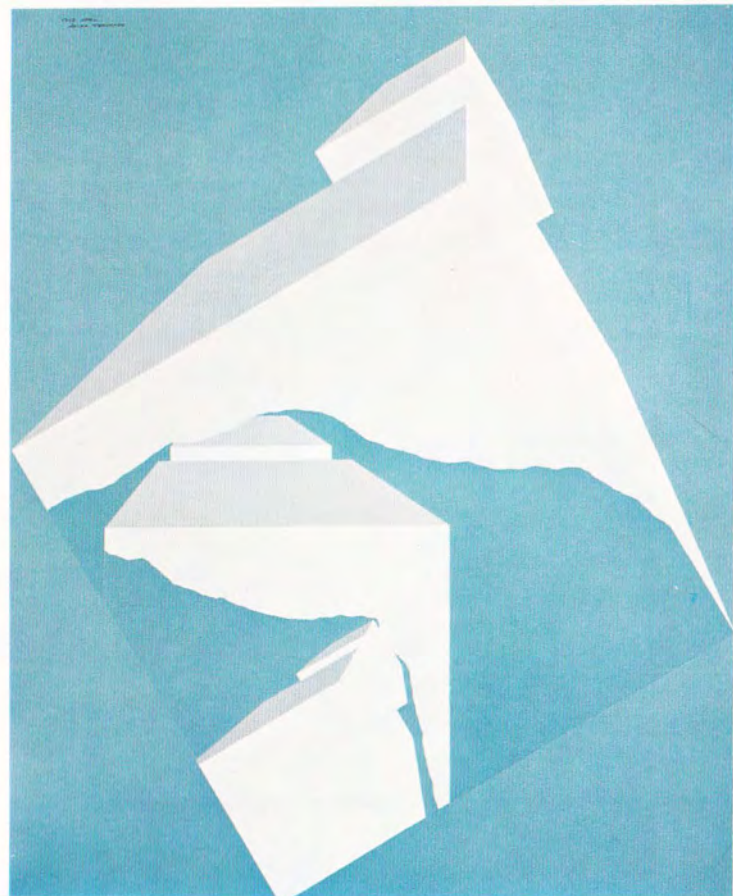


中嶋嶺雄氏

自由 9

月号

座談会 朝鮮半島・米国・日本 石原慎太郎/神谷不二/中嶋嶺雄
“自分の仕事”をしない社会党 G・ヒールシャー
“闘い”の奢り 原田統吉
連続 “イタリア共産党躍進”の教えるもの 江田三郎
インタビュー



石原 このたび韓国に行つてまた慶州へ行ききました。あそこには、日本の天王寺とか中尊寺の古墳発掘を指導した、金さんという工学博士がいるんです。ちようど古墳発掘が行われていて、普通はなかなか入れないので、が、運よく立ち会わせてもらいました。あそここの古墳は土製だから、石の部分が少ない。泥棒が盗掘しようと思つても、泥棒自身の生命に危険が及ぶんです。だから、慶州の古墳はほとんど盗掘されていない。最近大きいのを二つ開けましたが、木棺ですから、木は全部ドロになって流れてしまつていました。その中に納められていたものも、骨とか歯なんかは、全部流されておろし、ドロドロになったその中から、無機物だけがちようど浮き上がるような状態になっていました。首飾りと刀と鏡が、ちようど地表に現われているところをまず最初に撮影するというので、糸で碁盤目を引いて写真撮影のセツトをするわけです。僕は発掘につい

てはしろうとだけけど、今まででもよそで何回か覗いたことがあるが、今回は発掘の中で最もエキサイティングなところを見せてもらったのです。そこに出てきているものは何かといえ、何と全部「三種の神器」なんですよ。

なまなましく土中から出てきたばかりの古墳の遺物を見て、三島由紀夫さんのことを思い出しました。あの人は、僕と最後に論争したとき、「われわれは「三種の神器」を守るのだ」と言っていました。そのとき、僕は「自由」といつたら、「自由は何のためにあるのか」と質され、「文化と伝統のためだ」と答えたら、「しからば伝統と文化というものは何だ」「それは、率直に「三種の神器」といふべきだ」と明言した。ぼくはどうも困っちゃったんだけれど(笑)。三島さんが自決して、初めて韓国へ行つたら、慶州の博物館に「三種の神器」がたくさん飾つてあつたわけです(笑)。

古代のわれわれの文化は、決定的に

は、まったくしろうとですが、いま石原さんがおっしゃつた問題、つまり中国と日本との狭間に位置して、しかも半島文化を形成した韓国というものを、痛感させられたのは、慶州へ行つてからです。つまり、韓国の慶州が、日中両文化の形成に与えた意味は私にはそれが身近にありながら、それまで十分にはわからなかつたわけです。そこからいくつかの古墳を見て回りました。感じてきたことは、私が以前に北京ではじめて中国文明、中国文化に接したときの圧倒的な重圧感や、また日本の奈良や京都で感じる日本文化の「完成感」と比べてみて、いま石原さんがおっしゃつたように、韓国は、文化的に非常に「半島の」であるということだと思います。中国文化は、中国なりに、たいへんな重圧感というか、そこから逃げたいようなものがありますね。また日本文化は、奈良や京都を見ても分かるように、心を洗われるような洗練された「完成感」があります。しかし、

その中間にある韓国は少し違う。この問題をどういうふうにかえたらいいか。「半島文化」あるいは日中という二つの大きな文明の間にある「狭間の文化」——そこに、韓国の持つている「ある種の悲しさ」のようなものを、私は感じるんです。現在の日韓問題を考える場合、原点としてそういう点を確認しておかなければならないのではないのでしょうか。

石原 それはまったく同感ですね。

中嶋 つまり、韓国には非常に多くの遺跡があることが分かってはいますけれども、現存しているものは意外に少ないし、それから受ける印象も中国文化のある仏像とか、日本にある神社仏閣などから受ける印象とは明らかに違います。

石原 こういうふうになると、韓国の人は必ず怒るだらうけれど、韓国は、日本から見ると「日本的な地方」という感じがしますね。文化の伝達からみれば、向こうのほうが順はずつと

朝鮮半島の影響を受けていたし、そういう点では、日本と韓国とは一種の文化共同体であつたわけですよ。三島さんがあれを見たら、さぞがっかりするだらうけれど……(笑)。つまり、聖徳太子の『三経義疏』などは、半島から渡来した帰化人がいわば特別補佐官とつた立場でやつたもののようにです。私たちは、そこまで歴史を遡行したところから日韓関係を考えていかなければならない。そしてそこから生まれる日本にとつて韓国がいかにバイタルなものであるか、また韓国にとつても日本がいかにバイタルなものであるか、といった認識がなければ、政治をひくるめた相手の国家とか文明社会というものを、全体的にしかも本質的にとらえることができないのではないか、という気がしたのです。

半島文化の「かなしさ」

中嶋 私は、韓国の文化について

先だけけど……。

神谷 韓国へ行きますと、われわれがいま使っているもののいかに多くが向こうからきたものであるかということに気がきますね。当然のことですが……。しかし、なかには、韓国人が実は元祖でないものを、元祖にしてしまつてるところもありましてね(笑)。基本的な歴史認識がどうか、文化認識がどうかというほどの問題ではないんですが。たとえば、花札。ある韓国人がこれもこちらが元祖だ、といった。しかし待てよ、小野道風の雨のやつはどうなっているかなと思つて見てみましたら、小野道風が韓国服を着て、やつぱり蛙が跳んでいるんですよ(笑)。あれは、どうも日本から行ったのじゃないかといつて笑つたんですけどね。

日韓関係のむずかしさ

本誌 「文化論」的な視点からのお話から始まつたわけですが、もう少し政治次元の生々しいお話にも触れてい

ただきたいと思いがすが……。

中嶋 僕自身もそうですが、一般的に、日本人は、中国のことは非常によく知ろうとしているし、また知っているわけです。しかし、韓国のこととなると、ほとんど知らない。いわばアジアを考えるときの認識の空白ですね。韓国あるいは朝鮮半島のことを全く抜きにして、東アジアを考えている。ところが、ひとたび情勢が流動化してきますと、逆に歪められた形の韓国のイメージ——たとえば、韓国＝金芝河とか、韓国＝朴政権＝ファッショという非常にいびつな認識をもつ。そこに問題があるのではないでしょうか。

日本では一般に、ベトナムがああいう事態になったあと韓国は非常に揺れている、といわれていますが、行ってみて感じた印象からいえば、韓国にもそれなりの普通の生活というものはもちろんあって、民衆もただただ動揺しているわけではない。やはり普通の社会、がそこにあるわけでそのリアリテ

ィーを抜きにして、ベトナムの次は韓国で、サイゴン陥落以降韓国は国をあげて混乱・パニックに陥っているかのようにいうのは間違いではないか、という気がしますね。

石原 日本と朝鮮半島の国々との関係を考える場合、そこに住んでいる民族相互の、民族的・文化的な混淆の度合というものを踏まえて考えなければならぬと思う。それがいろいろと変貌・変形して現在の日韓関係があるわけですから……。あえていえば、日本と韓国の関係は、アメリカ合衆国とイギリスのような関係——体裁としてはもう少し小ぶりなものかもしれませんが——であると思うんです。そういう歴史的・文化的・民族的背景がある。アメリカにとって、イギリスが存在する限り、ヨーロッパはどうしても見捨てることのできないインテレストであり、そういうメディアとしてイギリスがある。日本の場合には、韓国から先は別れないわけですが、私たちにとって韓

国という国は政治的にも、バイタルなインテレストです。そこから先にヨーロッパのような存在はないにしても、逆に、民団・朝総連というような膨大な数の、しかも非常に強い政治意識を持って対立している人口を、日本が抱え込んでいるという問題もある。

だから、私は、この問題に冷静にスマートに対処していかないと、必ず何度でも、とても厄介な、深い傷を残すと思う。

中嶋 スマートに対処するということは、非常にむずかしいことですね。私はつい日中関係と比較するんですが、日中関係よりもはるかにむずかしい。

相手が中国人だったら、向こうが無理なことを言えばこちらと同じレベルで相手に無理をいうといった形で対決することができると思うんですが、日韓関係はそういうやり方ではかたづけられない特殊な歴史の重みみたいなものを持っていると思います。

今回韓国へ行った際、韓国のある学者から、「一連のアジア情勢の流動化によって、日本人は、日本にとって朝鮮半島がもつバイタルな意味をどれほど認識しているか」と質問されました。それに対して「非常に強く認識している」と答えますと、「結局、あなた方は、われわれを日本の安全保障の盾として考えているにすぎないのではないか」ということになるわけです。しかし、それにこりて、今度は「いや、実はまだまだその認識は深まっていない。そこに問題がある」といいますと、「結局、日本人は韓国のことなんか真剣に考えていないのではないか」ということになる(笑)。また、韓国の学者の方に、この冬に中国、モンゴル、ソ連といった中ソ対立の渦中にある三国を旅行した経験を話しますと、「あなたはオポチュニストだから、そういうところへ行くんだ」というふうにいうわけですね(笑)。

さらに、「アジアの冷戦」という問

題について、われわれはいまこういう研究プロジェクトをくんで共同研究を始めている」と、紹介かたがた話しますと、「アジアの冷戦」とは何だ。われわれは「熱戦」の渦中にいるのにならぬ(笑)。こちらが「従来は朝鮮戦争を契機に『アジアの冷戦』という見方が固まったとされているが、われわれは、むしろ朝鮮戦争によって『アジアの冷戦』は『熱戦』化したのだ、という認識を持っている」と弁解して、やっとわかってもらえる(笑)。

そういうふうな、隣国同士でありながら、小さな対応のひとつひとつが問題をはらんでくるといったむずかしさをつくづく感じます。

新しい反発の可能性

神谷 私はサイゴン陥落以後の韓国を知りませんが、表門から応えてもきびしく反論され、それではということ裏門から行こうとしても、また別の

きびしい反論が返ってくる、という状況——これは今後ともつきまとうのではないかと思いますね。

例えばアメリカは「サイゴン陥落以後、韓国に対するコミットメントは守る」と再三強調していますが、そのコミットメントなるものも「日本および日米関係がバイタル・インテレストであり、それを保つために韓国に対するコミットメントがぜひとも必要」というふうに、一番のターゲットは日本だ、という論理ですね。

ですからいつとき、アメリカが次々とアジア各地を見離すのではないか、という疑惑が出ていたころは、韓国は非常に心配したでしょうが、それがそうではない、ということになって、いまは安心しているところでしょう。しかし、だんだん時がたちますと、アメリカにしろ日本にしろ、結局日米関係のための一つの手段として韓国を使っているだけだ、というナショナルリズムの面からの反発がでてくることは大い

にあり得ることではないでしょうか。

いまなら、たとえばシュレジンジャー米国防長官が「韓国には核がある。いざというときには、核を含めてフレキシブルな対応を考える」といえば、大変心強いと思うかもしれない。しかし、時がたちますと、要するに日本のためにアメリカが韓国で核を使えば、核の犠牲になるのは韓国で、プラスを得るのは日本とかアメリカだけだ、というロジックが強い形で出てくるかもしれない。事態が安定しますと、どうもそういった新しい反発が出てくるのではないかと思えてならないのですが……。

石原 いまの神谷さんのお話からは少しそれますが、シュレジンジャー発言と、それを受けての「アメリカの核が役に立たぬ」ということがわかったら、われわれは独自の核を開発する」という朴発言に対する日本のジャーナリズムや日本の大衆の反応を注意してみていましたが、これまでだったらも

っともつとヒステリックに騒ぐところを、思いがけなく冷静だった、という感じがしますね。

神谷 そのことは多くの人が感じたのではないのでしょうか。やっぱり変わってきたのかな、という感じでしたね、確かに。

石原 それからさつき中嶋さんは「韓国は日本の盾にすぎない」云々という話をされましたが、向こうの学者・政治家にあえて「日米安保の盾ではないのか」と話したんです。

僕は韓国が日本の安全保障の盾だっ
ていいと思う。しかしその前提として
われわれが持たなければいけない認識
は、アメリカの極東における二つの国
のプライオリティーは、「日本そして
それに付随した韓国」ということかも
知れないが、当の日本自身が、「韓国は
われわれと文化的に共同体であり、政
治的にも共同体であって、抜きさしな
らない間柄である」ということを認識し
かつ相手にも認識させれば盾というて

もそれは決して二国間の優劣を云々することにはならないし、地理的にあな
たの国が「北」と直接向かい合っている
ということをいつているにすぎない
のではないか。それならば盾という認
識でもないのではないか」といった
ら、納得しましたがね。

ただそのときに、「それはそれで結
構です。だけど、それでは最近の日本
の新聞の論調や野党だけでなく、とき
には政府与党の責任者が「北と南とを
等距離に」という表現を使うことがあ
るが、あれはどういうことか。あれだ
けは絶対に許せない」という意見はあ
りましたね。

今度田村さんなんか「北」へ行か
れたわけですが、「北」に対する日本
の政治家たちの外交姿勢・意欲にして
も、それほどラショナルなものでなく
むしろ、「何でも見てやろう」という
か、それならまだいいけれども、行っ
たことがないところが一つあるから行
こうではないか、という域を出ていな

い節もある。

そのことが韓国の当事者に与えるい
ろいろな心理的な影響とか、あるいは
政治的な影響についてはほとんど考え
ていない。

そんなことよりも、日本の議員の責
任において、アメリカの議員。とくに
ハト派の議員を、東京だけでなく、東
京経由でソウルまで連れていくような
努力をすべきではないか。そういう努
力をしないと、韓国側は、どうしても
結局、日本とアメリカとはいまでもハ
ネムーンの状態にあり、そのかたわら
にいる俺たちは日本の盾か、といった
コンプレックスを持つことになってし
まう。

いま、アメリカで、韓国に対する政
府の見解と議会の見解とが非常に違う
ということを、韓国の当事者たちは一
番心配しているわけですから、そのギ
ャップを、彼らだけでなく、日本の政
治家も埋める努力をすべきだ、と思
います。

「北」へのコンプレックス

中嶋 いま朝鮮半島をめぐる国際環
境が微妙に動いていることは事実なの
で、韓国でも、ソ連・中国との国交と
いうことを、学者とか政策立案者はか
なり真剣に考えている。つまりいま右
原さんや神谷さんがおっしゃったよう
に、アメリカ・日本・韓国という従来
言われていた連帯関係が、朝鮮半島を
めぐる国際環境の揺れ動きの中で、あ
る意味で動揺している。

そしてご指摘のように、日本の自民
党の中からも北朝鮮に行く人が出てく
る。また日本の政府関係者の中からも
米・日・中というような選択もしてい
る。例えば三木さんが、覇権問題で完
全に踏みきるとすれば、米・日・中と
いう一つの新しい国際政治上のコアリ
ッションを作っていくことになるだろ
うと思いますね。

逆に「北」のほうから見てみます
と、最近金日成が訪中したにもかかわ

らず、どうもそこに亀裂があるような
気がしますね。そしてソ連にも行く予
定がありながらまだ行っていない。北
をめぐる国際環境もかなり動揺してい
るのかもしれない。そうなると、双方
の当事者はストレスを持ちながら緊張
し、苛立っている。双方の背後にある
従来の国際政治上のコアリッションは
崩れつつあるということにもなりかね
ない。こういう三十八度線をはさんで
双方が孤立し、過熱する状況が一番危
険なような気がします。だから、最近
のアジア情勢の流動化によって、「新
しいアジアを」とか「新しいアジア外
交」とか「新しい国際環境」という声
が強いけれども、従来の基本的な国際
環境をへたにくずすと、とんでもない
ことになりそうな気がするんです。

神谷 さつきの「南北等距離論」に
ついてですが、私は自民党の党内ポリ
ティックスのことはよく存じませ
んが、好意的に解釈すれば、中国の場
合、自民党は最後まで手をつけなかつ

ために野党ベースで振り回されたという苦い経験がありますね。ですから北朝鮮の場合は、野党まかせで自民党は何もしないということではないほうがいいと考えているのではないのでしょうか。そういう意味で、誰かが北朝鮮とも関係を持つとするのは、それはそれで分らないことではない。もちろんいまの訪朝団がそれだというわけではないですが……。そういう考え方の保守党による「北」との接触は、むしろあったほうがいいし、それは何ん「南北等距離」ということではないはずです。

石原 私もそういう触診をするとは決していけないことではないと思う。それさえもなお「南」が神経質になることはやはりありますが、しかしそれよりもむしろそれをうかつに「等距離外交」と呼ぶような見識のなさが、問題ですね。「等距離外交」と触診するということとは全然違う。

神谷 それはその通りですね。た

ださっき「韓国の日本やアメリカへのコンプレックス」という話が出ましたが、韓国の人に遠慮なくいえば、韓国には「北」に対しても大きなコンプレックスがありますね。これは、何も日本だけで言うものではありません。だいぶ前のことですが、韓国で「正直に意見を言え」というから、「南北関係の一つの大きなポイントはそれではないか」と遠慮なく言ったことがありました。

石原 どういうコンプレックスですか。

神谷 やはり一つは朝鮮戦争でやられたというところに根差していると思いますね。それ以来、たとえば軍事的な面でもよく言われることですが、空軍を除いては特に海軍はそうですが、南北の軍事的なバランスはそれほど「北」に有利に傾いているとは思えないのに、ともすれば韓国人は、放っておかれると自分たちは「北」にやられる、というふうを考える。これなどは

一つのコンプレックスだと思えますね。

ですから、等距離外交という言葉もおかしいけれど、こちらに、等距離というつもりがなくても、「北」との接触を持つとする行為そのものに対して、韓国のほうが等距離外交だという見方をするというところもあるような気がしますね。

ですから日本側が、決して等距離というようなことではないんだ、「北」との接触を持つことが、結局韓国が望んでいる南北関係の安定化にプラスになるのだということを韓国側によく理解してもらえば、「北」と接触を持つのは、等距離だからけしからんという以外の反応も期待できるのではないかと、と長年思っています……。

石原 韓国の大衆の心理というか、私がいりいな人いろいろな形で会ってみての印象は、神谷さんとはちょっと違うんだな。つまり、朝鮮戦争のときどくやつつけられたという敵意

と反感は、おそろしいほど残っています。しかし、「いま「北」と戦ったら勝てるかどうか」という質問をわりと広範な人々にぶつけてみると、彼らは、自信を持って「勝てる」といいますよ。軍関係の人間だけではない……。神谷 そうであればいいんですけど……。しかし、たとえば「北」は、長年統一というテーマをとにかく掲げてきた。「南」はなるべく掲げまいとした。それなども、うっかり一緒になれば、あるいは一緒になろうとすれば北にやられるのだ、という意識があるからだと思えるんですが……。

石原 しかしそれは統一といっても、「南」の人たちは「南」から「北」に対する統一以外は自分たちにとってあり得ないという考えを持っているからではないですか。

反共にかわる柱

本誌 いま神谷さんは非常に合理的な側面からおっしゃったわけですが、



そういう合理的な次元の問題とは別に、韓国という国が、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に比べて、矢野（暢）さん等がよく使われることばですが、いわば政治的正統性（レジティマシー）の点で自信が希薄であり、それがコンプレックスの原因になっている、という事実はないでしょうか。

石原 そうですね。それが一番むずかしい問題だと思えます。しかし考えてごらん下さい。僕は、やめろといわれたのを強引にトンネルを見に行ったのですが、ああいうばかげた努力が、

明らかにある戦術・戦略のもとに行われている。しかも、それを始めたのが七一年の南北赤十字声明の年ですよ。また、年に十数件、日本を經由した「北」からの工作員が、「南」に潜入している。日本の法務省・警察のデータですが、つまり煙こそ立たないけれどももう火がついている二国関係の中で韓国は自由主義国家群の一員である、という制約のために、言論統制もいまま程度しかできず、野党にもある程度言いたいことを言わせなければならぬ。そういう意味でやはり韓国の政治はおそろしくめんどうでやりにくいと思うし、万人を納得させる形で、わが国は、この看板を掲げてかくこのとおりの姿である、ということはいかに難しいですよ。政治における人間的混乱の方が「北」のような非人間的整然さより共感できるものであるはずですよ。

神谷 韓国という国は、歴代、反共と反日の両方か、あるいはその片方のどちらかでやってきたわけですよ。李承

晩はその両方でやってきましたが、朴さんの時代は、経済発展のために、反日をやめて日本と結ぼうとした。ですから、反共が大黒柱になっているわけですが、現在の国際環境におけるデータと、韓国の国の柱としての反共とが、どうしても完全に両立しない。

それで反共のかわりに「統一」をもつてこようとしているわけですね。しかし、「統一」は、さっきも言ったように長年「北」のテーマであっただけに、「南」からはなかなか出してくれないのです。ですから、一九七三年六月二十三日の声明以来韓国は看板として「統一」を掲げながら、実際は「共存」を模索しているというのが現状でしょう。したがってなかなか反共に代わるいい柱が見つからないという基本的な弱さが潜在的にあって、それが、ある場合には直接的に、ある場合には屈折した形で出てくる、というふうに見えますね。

石原 僕が韓国に行っているとき、

向うの国会で、非常に大事な三つの法案が審議されていきました。一つは、民兵制度。第二は、防衛税。つまり、一定の所得以上の者に対して、累進して新規に防衛のための税金をかける。第三には、動乱のときにつかまっていた左翼とその協力者が、大体刑期満了になってこの一、二年の間に二万人近く出てくる。非常に危険だが、出さないわけにはいかないのです、それをどう管理するかという法律です。これは人権に関係してくる問題なので、これを摩擦を起さずにどうやるかという問題。特にこの第三の問題には、野党はなかなか神経質にならているようでした。

中嶋 確かに第二次大戦直後の状況と比べてみれば、当時は「北」を承認している国はほとんどなかったわけですから、そういう意味では現在は北の国際的地位は確かに高まったといえます。国内的にも主体思想というようなことは象徴されるように、非常にリジッドな一枚岩的な体制であるような

イメージを与えていると思いますね。これは、全体主義的な国家が持つある種のマリアピリティである、実際に北朝鮮が「南」と比べてどれだけ政治的正統性をもっているかということとは、少し次元の違う神話的な側面が強いのではないですか。たとえば最近の宇都宮徳馬さんの話なんかをみると、外貨不足がいかに深刻であるかがよくわかります。

韓国にも、もちろん、言論の抑圧はあると思います。しかしやはり野党が存在し、少なくとも議会制民主主義を取っているわけですね。しかし「北」にはそれが全くない。そういう国が持っている一種の弱さ——これは潜在的な弱さですが——からすれば、「北」のほうにレジティマシーがあるように感じられるかもしれないが、現実はずしもそうでないということではないでしょうか。

私が一番びっくりしたのは、ついこの間まで朴政権に対してあれほど抗議

していたジャーナリストや、高麗大学の学生などが、ともかく総力安保ということではみごとに結集したことです。一般的には、それは虚偽であつて、あの強権政治の中で作られたニセの結集であるとされている。それが日本では常識かもしれないけれど、実はそうではなくて、あれほどまでに朴政権に対して抗議した人たちも、ベトナムの状況は、まぎれもなくイデオロギー的な意味での侵攻であり、共産主義体制の勝利であったということを、直感的に感じとったと思う。その点では、日本人のほうが誤っていた。日本人にはベトナム情勢の急変を民族解放だというふうには受けとっていた人が多いけれど、実際には北からの侵攻だった。

彼らは、直感的にそう感じたがゆえに、この点では一致できたということですね。こんなに近いところにながら、そのへんところが理解されていませんね。石原さんが座談会に入る前におっしゃった、日本では金芝河と東

亜日報が完全に同じように受け止められている、というように同じ問題だと思いませんね。

神谷 中嶋さんから「北」のほうに正統性があるように感じられているだけで、実は……という話がありました。僕は、レジティマシーという問題は主としてどう感じているか、という問題だと思ふんです。だから、遺憾ながら、やっぱり「南」のほうの感じられ方が、つまり南のレジティマシーが弱いというか、薄いことは認めざるを得ないのではないのでしょうか。そ

れゆえ「南」にとつての課題は、正統性を培うもの——これはやっぱり基本的な国是だと思います——をはっきり再提起することではないでしょうか。

シアヌーク的存在に

なろうとした金大中

本誌 表門から行ってもうまくいかないし、裏門から行ってもまたうまくいかない、という議論を聞いていますと、それにもかかわらずうまくいかなければいけないんだ、という感じがする反面、極端に言えば、日本が日本のことを考え、アメリカがアメリカのことだけしか考えないのは当然ではないか。日本人にとっては日本人が生きて延びることが大事なのであって……という気持がしなくもないんですがね。

石原 だけど、国家対国家のタマエ論からいえば、そうはいかない。李承晩ラインというような以前の問題は別にしても、日韓国交正常化だって、ほんとは両方の首脳が腹を切るつもり



でやったわけですが、いまになって、やってよかったということになっていく。

ところが最近、金大中問題をきっかけに、朴大統領狙撃事件が起こり、また韓国は日本にとってはれものみたいな存在になってきた。しかし国家対国家のタテマエからいえば、種をまいたのはみんな日本側です。金大中の出入国管理法違反だって、法務省が困るといったものをライシャワーのプレッシャーである閣僚がやったんだから。日本の大臣自身がスポンサーになって、出入国管理法違反を犯し、ビザのない人間を赤十字を使って入国させた。そして金大中はその間、勝手に出たり入ったり、あるいは病氣療養と執筆という滞在目的以外のこと、つまり日比谷で反朴政権の大集会をやり、多くの日本の政治家に反朴政権を説いて回ったりして、それであの事件が起こったわけでしょう。

金大中は、海外にいてシアム・ク殿

下みたいな存在になろうという意図をおそらく持っていたと思いますね。

だから、日本の韓国居留民団をスタズタにして、アメリカも、彼が行って韓国に対する世論を分裂させたわけですから、それはまったく分裂のための分裂でしかなかった。そういうた虚構でしかない一種の海外政権のようなものをつくろうとしていた。それがいいか悪いかは別にしてあのような事件が起こった。日本の主権が侵されたかもしれないが、その前に、日本の閣僚が法を犯して金大中を入国させているんだから……。しかも、文世光事件が起これば当時の木村外相が、日本には刑事的責任も道義的な責任もないといったりする。外務省の局長はまさおになった。

僕はちょっとおかしいと思ったから外務委員会で「日本に対して「北」の工作が実際にあり、さらに日本を経由して韓国に及んでいる。国交のない国が友好関係にある第三国に対して、日

本經由で「工作」していることを、法

務省はどう思うか。事実と認めるか」と質したら、「認める」「それに対して法務省はどう思うか」「非常に困る」それで「では外務省の所見は。外務大臣の見解を聞きたい」「事実があることを認めるか、認めないか」「認める」「迷惑か、迷惑でないのか」「はなはだ迷惑である」「迷惑をかけられているのだったら、非公式でもいいから「北」に向かってこういうことがないように抗議しなさい」といったら、それには返事がなかった。そこまで言わなかったら、あたりまえのこととも言わない。

そして、一方では、朝鮮半島に緊張はないなんてことを公式に言うわけでしょう。

僕は南北どちらの肩を持つわけでもないが、日本の政府の、いかにも場あたる的な小さな局面だけの体裁づくりが、どんどん大きなものを壊してしまったという感じを持っています。そ

の背景には、ライシャワーとか、朴政権を口汚くののしっているアメリカの一、二の宣教師とか一部の学生たちの支援がある。特にライシャワーには、日本の問題について語るときもそうだけれど、何ともいえない変なよき理解者としてのパトロン面した優越感があり、要するにありがた迷惑です。特に韓国の問題については、おせっかいがましくて、間違った認識をもった、非常に有害な学者ですよ。しかも、そういうものに日本の官僚が非常に弱い。八つ当たりでいう訳ではないが、とにかく、上海バレーを見て芸術的に感動したなんていっているんだから(笑)。

中嶋 はれもの云々の話についてですが、私もはれものにさわるような対応だけでなく、もっとストレートな、フランクな対応ができないものかと思えます。しかし日本は征韓論以来韓国に対してイラショナルな立場をとりやすい民族的な体質を持っている。だから一種の禁欲は必要ですね。禁欲を、



いかに冷静にラショナルに政策化してゆくかという綱渡りをしていかざるを得ないと思うんです。たとえば金大中事件ですが、金大中氏が日本に来て、社会党や共産党が持ち上げたり、ジャーナリズムがクローズ・アップするという次元のことだったら、ああいった事件は起こらなかったと思います。事件をつくったのは、自民党の中核ですよ。つまり、日本の対韓政策とか外交政策に参与し、あるいは決定権を持っていると思われる人たちが、金大中に会った。そのことによってたださえ

苛立つていた朴政権は、拉致事件を犯さざるを得なくなりました。これは、やはり私が申し上げたような意味の禁欲の欠如によるものだと思いますね。その点からも、今回の宮沢訪韓は重要ですね。

石原 この間、ある人々に会ったらその人は三木さんに「経済閣僚会議をやらなければだめですよ。宮沢外相が訪韓するとき、経済閣僚を一人でも二人でも連れていったらどうか」と話したそうだが、三木さんは「絶対だめだ。日米会談後のほうがいい。そのほうが、経済閣僚会議を開くにしても、意味が明確になる」と譲らなかつたそうです。

神谷 日米の後に日韓という考え方は、いままではそれでよかったかもしませんが、これからの日米関係を考えれば、逆だと思えますね。

石原 僕もそう思います。

神谷 つまり「ベトナム後」日本自身が積極的なポイントあげたという

わけでは別にないけれど、アメリカに對してもアジア諸國に對しても日本の存在が大きくなってきた。いまの南北朝鮮の招待合戦だつて、例の覇権問題だつて、その現われだと思えますね。また、この前のキッシンジャーのジャパン・ソサエティーでの演説のようなものも、それだからこそ出てくるわけで、存在が大きくなれば、日本について以前から言われていたアメリカの

「肩代り」というようなものではなく、日本そのものに対する期待が大きくなってくるわけですから、当然韓國の問題についても、日本はかくかくしにかじかだということをはつきり言えるような状態で、アメリカへ行かなければいけないと思えますね。

石原 まったくそう思いますね。

本誌 それが真の意味での自主外交ということでしょうか。

神谷 そうですね。しかし、現在では、金東雲の問題があつて、そのためはまだ合意ができていない。だけど、

そうこうしているうちに、時間的に間に合わなくなりますよ。それに金東雲のことをあまり強く言えば、韓國は文世光を言うに決まっていますから、そうするとこれはもう、ちょっとした泥試合ですね。

人間は何と愚かしく

政治は何と無駄なことか

本誌 その議論は一応おいてサイゴン陥落以後に訪韓された中嶋さんと石原さんにインドシナでの新しい事態が韓國でどういうふうを受け止められているか、についてお伺いしたいのですか……。

石原 それは、端的にいつて、総力安保ということと結果するという反応をみせている。かつては反朴だった学生も野党も。野党の党首と大統領の会谈もあつたし、多少の抵抗はあつたけれど、はじめに話した三つの法律は通りましたね。それに対して野党側は修正のうへ賛成した。

神谷 例のトンネル事件を起こした理由を合理的に納得しようと思えば、そういうこともありませんね。

僕はまだ見たことがありませんが、中国では、北京その他の都市の至るところに地下壕があるそうですね。あれだつて同じでしょう。

中嶋 でも、三十八度線の板門店の周辺にあるトンネルと、中国の地下壕はちょっと意味が違うのではないのでしょうか。

神谷 しかし、セカンド・リアリティーがファースト・リアリティーになつちやつたという点では同じですよ。

石原 しかし、あのトンネルは、ほんとうにやるつもりでいたんだらうな。大変なものですよ。そのために北側の境界線を五〇〇メートルくらい勝手に作りかえて、前に延ばして自分たちの陳営の中から掘り出している。ただ、あそこにもぐつてあれを見ていると、たわいない、何の役にもたないかもしれないことをよくもあれだけやつた

神谷 野党、特に新民党総裁には少酷な言い方かもしれませんが、片や朴正熙、片や新民党総裁・金泳三、といえるほど人は野党を認めていなかった。それが、いまおつちやつた野党の党首が大統領とさして会見をやつたことによつて、対等とまではいかないまでも、イメージが上がつたということ、だいぶ金泳三の鋭鋒が鈍つたのではないですか(笑)。

しかし、いまは非常時体制が本格的になつたばかりですから、このことについて、まだ別に文句は出ないと思いますが、私が書いた原稿ではないですが、「朝鮮半島には危機はない」という状態が理解されてきますと、それほどシリアスでもないのになぜこんなに厳しくするのか、という反発がまた出てくることはありませんね。

石原 しかし、池田大作でさえ、あそこまで創価学会を作つてしまうと、することがなくてかどうかはしりませんが、自分のプレステージとその組織

とつくづく思う。人間は何と愚かしく政治は何とむだなことか、という感じがするね。

韓國のインテリは、「あんなことまでして統一なんかしないでいいから、南は南、北は北で、それぞれがもう少し安定して、マチュリティーをめざしたらいいし、めざしたい」と言っていましたかね。そういう点で象徴的だったのは、今度詳しく見てきた蔚山と浦項です。浦項の製鉄所は日韓協力の非常にいいモデル・ビルディングです。

その周囲に製鉄関係の工場を集めてしまつたから、溶鉱炉から三〇〇メートルも離れていないところで厚板が作られているわけで、あんな機能的なメカニズムを持った製鉄会社は、日本では見当たりませんよ。また、蔚山の造船所はべらぼうに大きい。僕は造船に興味があつてわりに詳しいんだけど、びっくりしちゃつた。とにかく一つの規模でいえば世界で一番大きい造船所を作つた。僕は、ああいう韓國の地道



韓國で発見されたトンネル

を維持するために、宮本に会つてみたり、何だかいろいろなところに出かけて、いろいろな人に会つたりしていますね。金日成にしても、もう何かやらないともたなくなつてきているのではないでしようかね(笑)。

自由選書

日本図書館協会選定図書

シンポ
ジウム

これからの日本

好評発売中!! 二三四頁 定価六四〇円

日本文化フォーラム編

日中国交回復は解決への第一歩でしかない。アメリカ、ソ連、アジア等には、いまや新たな緊張と不安が生れている。さまざまなギャップを露わにしている多極化世界で日本の前途は必ずしも明るくない。われわれの進むべき道とは何かを探った好著。

(討議者)

- 石川 忠雄
- 今川 瑛一
- 衛藤 滄吉
- 小野 正孝
- 岸田 不助
- 神谷 純之助
- 佐伯 彰一
- 佐伯 彰一
- 佐藤 純之助
- 山崎 正和
- 三好 長世
- 林 三郎
- 花井 等
- 中嶋 嶺雄
- 佐藤 昌盛

社 自由
東京都渋谷区渋谷1-1-19
〒150 振替東京72133

えば去年の七月、八月の時点と今年のいまの時点を比べてみれば、ずいぶん違いますね。去年の七月、八月の時点ではライシャワーも議会で証言し、それをサポートするような社説をかなり見ることができましたが、昨今は、そういうことはあまりありませんね。

状況に規定される朴大統領
本誌 いまの韓国を考える場合、朴正熙という人を見るかということ、一つの基本的な前提になってくると思いますが、その点についてはいかがでしょうか。

神谷 私は、簡単にいえば、それに代わる人を見つけることはできない、と思いますね。

中嶋 神谷さんがおっしゃったように、韓国の野党は弱体でしょう。金大中は、日本の一部では朴正熙に代わる人物であるというふうに扱われていますが、僕はとてもそうだと思えない。だから、いまの朴政権が存続していくと見るのが現実的な見方だと思ふ。そうだとすれば、現在朴政権が持っている病理とか弱点というものをできるだけ少なくしていくにはどうすべきかという方向に議論がいくべきでしょう

ね。

石原 ほかの国の場合、たとえばアメリカの場合はフォードが出てきたからアメリカはこうなるとか、日本の場合は三木が出てきたらこうなるといった具合に、国の政情を、その国の総理大臣とか大統領のキャラクターではかれますね。ところが、朴さんという人は逆で、あの人が登場してくる前に韓国の政治状況がある。それは、一つには「北」からの見えるもの、見えないものを含めた脅威であり、一つには戦争という体験に基いた大衆のサイコロジイです。そういう状況の中で、逆に

に軌道に乗り始めた産業化は、やっぱり積極的に評価すべきだと思うし、日本としては、防衛に対する投資としても、自衛官の数を増やすよりも、そういった面で韓国にいい条件で協力したほうがはるかに効果があるような気がしますね。

神谷 僕は韓国の場合、産業化に日本程度の農地改革を伴えば非常にいいと思います。農地改革を伴っていないために、基本的に弱くなっているのではないでしょうか。確かに工業の面では大きなアチーブメントを達成していますが、問題はやはり農業とのコンビネーションだと思います。これは、セマウル運動で、かなりやってはいますが、やはり農地改革までいかない、われわれの目から見て少なくとも長期安定という感じは出てきませんね。

石原 農地改革のどういうところが問題なのか。区画整理に関していえば、韓国の田園はみごとに美しい。所有関係ですか。

神谷 所有関係です。非常に小作が多い。

石原 ああそうですか。しかし、やってできないことはないでしょうね。しかしやらなくても朴政権に対する農村の支持基盤は非常に強いでしょう。

神谷 与党は日本の自民党以上に農村依存です。

しかし農村依存であるゆえに農地解放ができない、ということでしょうかね。

米議会、マスメディアの変化
本誌 韓国で達成されている産業化は、かなり大きな達成だと思っています。ただ、それが、韓国は日本やアメリカから見ると、守るべき価値をもった存在だと言うコンセンサスに、完全にむすびつかないところに、多少問題があるような気がするのですが……。

神谷 アメリカの場合、さっき石原さんがご指摘になった行政府と議会の意見の差はサイゴン以後は解消している

ますね。もっともこれは一時的なものかもしれないが……。議会のハト派の連中もいつせいに「韓国に対するコミットメントを守らねばならない。在韓米軍を軽々しく退いてはいけない」と言っています。そういう意味では、ナショナル・コンセンサスになっていると思うんです。ただ少数の例外として、いわゆるハーバード・グループがあり、これは、「日本は大事だが、そのために韓国に対するコミットメントまで守る必要はない」という言い方をしています。しかしこれは、それほど大きくならないと思いますけどね。

日本では、一九六九年十一月の佐藤・ニクソン共同声明での、例の韓国条項以来、いろいろ反論が出されている。そしてそういう反論はアメリカにさえもあるではないか、というようなこと、それほど事態を冷静・深刻に見ないままに今日に至っているといえますね。

アメリカのマスメディアでも、たと

朴大統領の性格が規定されているのであって、いまやっている政治が朴大統領の政治家としてのキャラクターの発露であるということではない。つまりその前に韓国大衆の政治的アプリアリがある。反共反北という……。これは日本人には理解しにくい。

神谷 この前「タイム」と「ニューズウィーク」が、期せずして同じ週に韓国の特集をやりましたが、案外朴大統領の「人間像」は報道されていないのではないのでしょうか。ある意味で金日成と似ているところがあると思いませんか。たぶん金日成のほうがその度合いはひどいと思いますが、いまや宮殿の奥に鎮座して、自分に不愉快な音は一つ聞こえてこないというような(笑)状態の中にいるのではないかと。ですから、逆にいえば、大統領の「人間像」についてその率直なところがあまり外に知らされていないのではないのでしょうか。

石原 日韓正常化を達成したあと、

わらずみんないいものを着ている。その秘密はどこにあるかと思うくらい、きちんとしたものを着ている。町の表情は明るいし、しかも南大門や東大門の市場には品物も豊富にあって、その風情には愛すべきものがある。その現実がまったく抜け落ちている。ちょうど一時期の中国が、日本を軍国主義だといって、日本では軍人が民衆をその軍靴の下に踏みつけ、民衆はうちひしがれているというマンガをたくさん書いていた。あれと同じように、われわれは韓国を見ているんです。それは非常に大きな間違いだと思いますね。

初めて日本に寄った。佐藤さんのときでしたかね。あのとき、朴大統領は非常に緊張していたことを覚えています。そのあと、ちょうど私が訪韓したとき、ガボンというアフリカの国の大統領が、ルーマニアに寄って、そこで考え方を変えて、北鮮に寄らないで、韓国に行くと言いだして、北京に寄って、そのあと急遽ソウルを訪れたというので、ものものしい警戒体制で大歓迎をやっていましたが、そのときの感じでは、一般に想像されている朴さんとはだいぶ雰囲気が違う人だと思えました。彼は大変ストイックな人のようですな。

まわりにいる大臣たちは「まだ危ない、まだ危ない、いつ戦争が起ころかわからない、オレたちがいなければ」という自負があるようですが、韓国はもうその時期を卒業して、できるだけかけ足でそして専門家を活用してあの手この手を尽くして産業化をやるべきだ、という気がしますね。

石原 そういう認識のギャップは、ほかのどの国よりも韓国に対して多いのではないのでしょうか。そういうギャップは、日本では、学生とか一部のインテリだけでなく一般の人の間にもあるな。それでいて、向こうの若い人も日本のことを知らないんですよ。

神谷 もう一つ、きょうは最初から韓国に対して非常に遠慮のない意見もありましたから、多少バランスを取る意味で言い添れば、やはり日本人は韓国および韓国人に非常に期待を持っているのではないのでしょうか。期待があるのになかなか思うように成就されない

認識されない「オーダーの違い」
中嶋 私は東南アジアをあちこち回るので、その点の基盤は、韓国のほうがはるかにできています。すでにテイクオフしていますからね。

神谷 それは、だいぶオーダーが違うでしょう。
中嶋 オーダーが違います。だけど、そのオーダーの違いが一般には認識されずに議論されていることが問題だと思えます。だからその点はチェーサーさんには悪いけれど、南ベトナムとはずいぶん違いますね。

僕が学生を教えるとき一番困るのは、韓国をどういうふうに認識させるのか、ということ。学生には、金芝河とか、例のT・K生の『韓国からの通信』といったものから受ける認識しかないわけです。韓国は牢獄国家であって、日常的な生活がまるでないように感じていますからね。それがそうではない。失業率が高いが、にもかか

いということから、むやみにきびしく感じるといふこともあると思う。東南アジアのある国々に対しては、初めからそんなに期待もせず、あきらめているから、少々何かがあっても、何ということもなくすましてしまおう(笑)。

石原 日本と韓国の間には政治・経済の面の交流ばかりが先行しています。が、もっと情念的な交流もやっていると、日韓協力体制ができて、向こうのプロジェクトに日本の手が重なっていったとき、必ず反日が出てくると思う。そうならないために、この間向うの大臣に会ったとき「日本の映画を

好評発売中!

不誠実な日本

那須 聖著

定価六八〇円

日米危機をもたらしたものは、無責任な反米論調にある。このままでは極端な反日運動に発展することは目に見えている。政財界・マスコミともに反省すべき秋である。

【主な内容】

日米経済危機の原因を洗う
日本のマスコミがつくる日米危機
田中首相に直言する

自由発行元
社 1-1-19
区 1-1-19
都 72133
自 振替
東 150
京 150

自由選書

入れなさい」と言ったんですが……。
 神谷 いや、僕がもし韓国の大臣だ
 ったら、日本の映画は入れませんね。
 だって、流行歌一つとってみても、韓
 国で一番人気があるのは美空ひばりに
 似た歌手ですよ(笑)。これはうっかり
 映画なんか入れたら大変だ、という気
 持になりますね。

石原 流行歌の旋律は、実に似てい
 ますね。中国には全然異質のものがあ
 るけれど、韓国の流行歌は、こんなに
 似ているものか、と思う。僕らと感情
 や風土や血が混ざり合っているな、と
 という感じがします。だから、それを神
 谷さんのようにいわず(笑)もう少し
 ポジティブな形でインプルーブしてい
 く努力をやるべきだと思えますね。

このごろの韓国のロックバンドは、
 髪の毛の長いです。髪を切らされる
 なんて嘘ですよ。台湾は切らなければ
 ならないかもしれないけれども……。
 ですから浅利(慶太)なんかの演出する
 ブロードウェイの焼き直しみたいなミ

す。一つには、金日成が、いわゆる武
 装南進を考えていたところへ、インド
 シナ半島で武装南進が成功し、ハノイ
 に対抗する意味もあってとにかく何と
 かしなければいけないという気持から
 訪中した、というオーソドックスな見
 方があると思えます。第二には、むし
 ろ中国が先に招いたという見方もあり
 ます。これは、中ソ対立という状況が
 非常に深刻になってきたので、ソ連に
 行く前に中国に来てほしいという非常
 に切実な要求が中国の側にあった、と
 いう見方です。それから第三には、実
 は金日成は明らかに武装南進を意図し

ユーリカルでも持っていてみてみようか
 と考えています。たとえば『ヴェロー
 ナの恋人たち』のように、非常にアメ
 リカ的で、しかも東洋人である日本人
 がやったミュージカルを持つていった
 ら韓国の若い人はどういう反応をする
 かなと思って、ひとつああいいうもの
 を持ちこんでやろうかと思っているん
 です。そういつたことをして、沈黙した
 感情のしこりを若い世代からかき回す
 必要があるんですよ。

中嶋 映画はともかく(笑)、雑誌と
 かファクションは入っていますね。
 神谷 何といっても大きいのは、学
 校で日本語教育が広範にオーソライズ
 されたことですね。三年前からです
 か。これは大きいですよ。

石原 僕是非常におもしろい経験を
 しました。VIPだから、第二トシネ
 ルへ案内するのは危険で取り止めにし
 ろ、という命令がきて、行けなくなっ
 た。やめようかなと思っていたら、案
 内係の大佐が来まして、話をしている

ており、三日でソウルをテイクオーバ
 ーできると考えていた。そうだったと
 きの国連での対策を中国に相談に行っ
 たのだ、という見方ですね。けれど
 も、真相はよく分からない。しかし現
 在の中ソを考えますと、少なくともい
 まの朝鮮半島には、再び朝鮮戦争のよ
 うな状況になる国際環境はないのでは
 ないか。それは、アメリカが、シユレ
 ジンジャー発言以来、非常に強いコミ
 ットメントの姿勢を示しているという
 ことを抜きにして考えても、朝鮮半島
 で第二の朝鮮戦争のような事態が起こ
 ることは、国際環境が許容しないと思

うちに、彼が、急に「わかりました。
 ”作家としての石原さん”ということ
 で、僕の責任において第二トシネルへ
 お連れします」と言って、国連の手續
 も変えてくれた。途中、その男といろ
 いろ話をしてみると、これがシナリオ
 ・ライターで、テレビやラジオや映画
 の脚本を何本も書いています。彼は日本
 のシナリオをいろいろ通読しているそ
 うで、実におもしろい人だったな。妙
 なところに妙な人がいるもので、そう
 いった点と線をつないでいくと、情念
 のうちに厚い関係ができてくると思っ
 ちゃいますよ。それを取り戻すことが大切
 だと思えますね。

国際環境が許容しない武装南進
 本誌 最後に、北京、モスクワなど
 共産圏の国が、朝鮮半島の現状を、ど
 う考えているかについて、議論してい
 ただきたいと思えます。

中嶋 今度の金日成訪中について
 も、いくつかの見方があると思いま
 います。ただそれを、韓国の人たち自
 身がどういうふうに感じているかとい
 うこと、あるいはわれわれが、いわば
 第三者として、そういう感じ方に対し
 てどういう認識を持ち、さらに日本の
 外交政策にそれをどう反映させていく
 かということは、別問題だと思いま
 が……。

神谷 中国は、いまおそらく二十五
 年前のことを一番思い出しているので
 はないかと思えます。あのとき、アメ
 リカでは「もし大陸が台湾を攻撃して
 も、それは中国内部の問題だから関与
 しない」ということを大統領がはっきり

自由選書

大国におもねらず

好評 発売中!

小国も侮らず

衛藤濱吉編

B6判 定価六八〇円

大国におもねらず小国も侮らず
 大陸国家の復讐と日本……衛藤濱吉
 日本の国際化を阻む「連統」の思想……中根尚三
 親中国派のための中国入門……杉森久英
 ほか六編収録

欧米との経済摩擦・アジア諸国の反日
 感情が増大しつつある今日、世界的実情
 と自国の体質を正しく認識せず、感情的
 な議論に流されては日本は孤立する

元 自由社 発行
 編集 衛藤濱吉
 振替 東京 72133
 1-1-19

自由選書

注目の書!!

新聞七国論

現代のジャーナリズムを考える

り言っていた。しかし、朝鮮戦争が起きたために、対外課題としてはナンバードワンの台湾問題が、二十五年プラス・アルファ遅れた。しかも、このプラス・アルファがどれだけになるのかさえはつきりしないくらい遅れてしまったわけです。だから、朝鮮でまた何か起これば台湾問題の解決が非常に遅れる。これを中国は懸念しているでしょう。そういう点からいっても、北朝鮮の存在はバイタル・インタレストであつても、「北」による朝鮮半島の統一は、バイタル・インタレストであるはずがない。こういうことを考えても、金日成は武装南進しないのではないでしょうか。

四月十八日に、金日成主席が訪中して、最初の歓迎晩餐会の席でやった演説——「得るものは統一であつて失うものは三十八度線だ」にしても、私は強硬な演説とは思わない。あれは大変強硬だったという人が多いんですが、強硬だという人の大半は、平素金日成

の演説を読んでいないんですよ。あれが武力南進するということを示しているとするれば、これまでも何度か武力南進していなければいけない勘定になる(笑)。あの程度のものなら、場所柄とかタイミングを考え合わせると、若干威勢がいいということはあるにしても、それほど強硬だとは思わないんです。

日本人自身の主体性を

石原 僕は、北京で金日成がどういうオッファをしたか知りませんが、ここ一、二年というかざられた時限で考えてみると、シュレジンジャーが「場合によっては、在韓の戦術核兵器を使う」といったことは、非常に大きな牽制の意味を持つと思えますね。

中国は戦術核兵器をもっていないですね。これは、そういう攻撃・反撃が「北」に加えられたとき、中国が「北」を助けるわけにいかないことを意味しています。それに何よりも米中のデータ

ントも失い、対ソ関係がより危なくなるともいえる。ソビエトの場合、いまソビエトとアメリカがほかの衛星国、属国を抜きにして、じかに抱えている問題からいって、あり得ない。アメリカはデタントに名をかりたソビエトの火事場泥棒的策動をそう許さないでしょう。

そういう点を考えると、さつき中嶋さんがおっしゃったような電撃作戦で、ソウル近辺を確保するという事にして、「南」と「北」の人口比を等分にすくらしいのことはなるだろうけれど、そんなことは何の説得力もない。そういうことに備えて、韓国の人たちが緊張感を持つことは必要だと思ふし、当然だと思ふけれど、だからといって、正面きつての戦争になるとは思いませんね。

もしソウルの部分的な占領を目指すような作戦を展開したら、それだけで、韓国は大反撃に出ますよ。そのときアメリカがどう出るかということを考えてもいい。強い緊張とか火種はあ

るにしても、それに火がつくいわれは、いまの限りでは、少ないという感じがします。

それから少し飛躍しますが、北朝鮮を非常に扱いにくいイスラエルみたいな国にしておくことが、実は極東のバランスにとっていいのではないかと思えますね。そうすると、日韓関係も非常にうまくいきますし、中ソ間にもいろいろな思惑を含んだ摩擦が出てくるし、アメリカもどうしても韓国に関心をもたざるを得ないでしょうし……。

また、中国やソビエトにとつても、「北」が「南」を統一するかしらないか

ということ自体は、そんなに大きな問題ではない。ただ、そのことによつて日本がどう動き、アメリカがどう動いてくるかということが、彼らにとつてはよりバイタルな問題だと思えます。それに南北朝鮮にとつてもやはりかつて動乱があり、それが非常に強く政治的・心理的背景になって残っているという点と、韓国が南ベトナムとかカンボジアと比べると、発展途上国とはいえないながらも、ある絶対値にまで高まってきた産業国家であるということ、インドシナ半島の場合とおのずと

中嶋 神谷さんがおっしゃったようにいずれにしても、これからの日本は好むと好まざるとにかかわらず、アジアでますます大きな役割を担っていくことになるでしょう。その場合、政策的には、いろいろな政策が考えられると思うんです。「北」にもう少し「開放性」を与えらるとか南北の交差承認をするとか……。ただ最後にいいたいのはその場合、それが政策だということが十分確認できるくらい、日本自身に主体性がないと困るといふことです。本誌 どうもありがとうございます。

新聞の果す役割は大きい。明治・大正・昭和三代にわたる歪められた国家権力への挑戦にはめざましいものがあった。現代の新聞はどうか。新聞自体がすでに権力と化し、公正な世論形成の任を忘れ去ったのではないか。本書はその警告のための必読書である。

有竹修二／江夙進／衛藤清吉／入江通雅
原谷正造／香山健一／三好修 他著

定価 七三〇円

総合雑誌「自由」発行元
自由社
東京都渋谷区渋谷1-1-19
〒150 振替東京72133